

令和6年12月23日

倉吉市長 広田 一恭 様

倉吉市精神障がい者家族会
会長 真柴 智寿香



中部精神障がい者家族会
会長 町田 貴子



精神障がい者の福祉施策充実にする要望書

日頃より、精神障がい者の福祉向上のためにご配慮をいただき感謝申し上げます。
精神障がい者が地域でその人らしく当たり前に暮らしていくためには、まだ様々な課題があります。

ついては、下記のとおり精神障がい者の福祉施策向上のために要望いたします。
実現に向けての具体的な回答を令和7年1月末日までに文書でご回答いただきますようによろしくお願いいたします。

記

1. 精神障がい者への特別医療費助成について
令和5年8月1日より精神障害者保健福祉手帳3級支持者まで対象を拡大されました事に感謝致します。
助成対象を住民税非課税世帯ではなく、本人所得に対しての助成をお願いします。
2. 精神障がい者の雇用及び定着支援促進について
市役所においては、今年度の雇用状況、過去3年間の定着率及び支援状況について教えてください。
3. 義務教育における精神保健教育への要望
令和4年度高校学習指要項改訂で、保健教育の「現代社会と健康」に精神疾患の予防と回復を盛りこむことが義務化されました。
中学時代に発症する事例が多くあります。
精神疾患について、児童・生徒が自分ごととして理解し、支援を求め易い授業や環境づくりを整えてください。
ピアサポーターの活用をお願いします。
4. 精神障がいの人権問題としてとらえ、地域で安心して暮らせるように住民啓発をしてください。
5. 倉吉市及び中部精神障がい者家族会の周知及び加入促進についてご支援ください。

【連絡先】

倉吉市精神障がい者家族会事務局
〒682-0872 倉吉市福吉町 1400
倉吉市社会福祉協議会 地域福祉課内
電話 23-5600 FAX 22-5249



精神障がいとは・・・

統合失調症、躁うつ病などの精神科の病気は、100人のうち1人くらいの人にみられる、ありふれた病気です。国民の病気の五大疾患の一つです。発病には脳の「伝達物質」の不調やストレスなど、いろいろな要因が関係しています。コミュニケーションの苦手や過度の不安や緊張などの生活のしづらさがあがり、ひとりひとり違う症状にあった「治療」と「リハビリテーション」が必要です。

- ・精神の病気は遺伝ではありません
- ・親の育て方や環境のせいではありません
- ・本人の性格の問題や努力が足りないせいではありません

わかりあえる仲間との出会いは
回復への第一歩となります

誰(家族・本人)の責任でもなく、治療や適切な対応や支援で回復する病気です。
早期発見・早期治療が大切です。



～精神障がい者家族会に
入会されませんか～

◎お問い合わせ先

- ・ 中部精神障がい者家族会
倉吉市精神障がい者家族会

相見 Tel090-7995-5879

遠藤 Tel090-9463-1975

町田 Tel090-8994-2958

中本 Tel080-3877-4250

◎「精神障がいのある人」や「障がい」についての相談支援窓口

- ・ 倉吉市役所福祉保健部福祉課
0858-22-8118
- ・ 倉吉市社会福祉協議会地域福祉課
0858-23-5600



倉吉市精神障がい者家族会

中部精神障がい者家族会

私たち 精神障がい者家族会は こんな活動をしています

☐ ささえ合い(分かち合い)

ひとりで悩まず、一緒に語り合い、ささえ合い、仲間が大きな力になります。

☐ 学び合い(研修・視察など)

病気を理解し、家族の接し方や支援の方法、相談先、制度等について学びます。

☐ 要望、啓発

誤解や無理解による差別や偏見をなくすように活動しています。



(会員の声)

「一人で悩まないで一緒に話し合いました」

家族会に入ってよかったのは、同じ悩み、苦しみを持っているので、安心して何でも話し合える場であるということです。専門医や薬剤師などの話を聞いて、病気の知識を得ることもできます。(琴浦町・母親)

「よくがんばったね」

息子が14歳のときに病気に気づきました。親としてなすべきことを真剣に考えましたが、病気の知識や正しい対応のしかたがよく分かりました。家族会で正しい知識や対応を学び、息子に「よくがんばったね」と何でも話し合えるようになり、明るい展開が開けました。(倉吉市・父親)



「自分ひとりじゃないんだ」

家族会の当事者の人の様子がよくわかり、家族の方の対応が理解でき、とても勉強になります。(湯梨浜町・父親)

「娘の病がわかって安心しました」

娘は高校一年生の時に不登校になり、周囲の方々に励まされ、介護福祉士の資格を取りました。しかし、就職したとたん調子を崩し、25歳でやっと統合失調症と診断を受けました。「本人は原因がわかって安心した、自分のがんばりが足りなかったんじゃないんだ。」と自分を認めることができたようです。

親として、障害を受け入れるのに時間がかかりますが、何でも話せる仲間がいるだけで心が癒されます。(倉吉市・母親)

「ああ、家族会に入ってよかった」

息子は小さいときから大きな音をこわがり、家族の中でも孤立していました。親である私は誰にも相談せず、もうすぐ普通になると信じ続けていました。22歳で発症し、子育てが悪かったからかと自分を責め続けました。そのとき会に入って、神経伝達物質ドーパミンの話聞き、原因が分かりホッとし、私も息子も救われました。今、息子はパートで働いています。(北栄町・母親)

「家族会に救われました」

精神疾患のある人は自分の命を自ら絶とうとすることがあります。家族会では人の命の尊さ、人間の生き方、人権教育の学びの場でもあります。私自身、くじけそうになった時、つらい時、家族会にずいぶん助けられました。一人でも多くの方に入会していただき、一緒に考え、勉強していきたいと思います。(琴浦町・姉)



「仲間とともに見守りたい」

親もつらいけど一番つらいのは病気の本人。その本人を親として理解し支えてあげたい。

でも時々支えられなくなる。そんな時支えてくれるのが家族会の仲間。仲間とともに子どもを見守っていききたい。(倉吉市・母親)

精神の病気に対して正しい知識を広め、本人や家族が社会で安心して暮らせるように活動しています。
私たちは、精神障がいのある人やその家族の人権が守られ、安心してのびのびと暮らせる社会をめざしています。

知っておきたい
ハラスメント



気をつけたい障がい者へのハラスメント

東京都福祉人材センター 登録派遣講師 小嶋 洋昭 氏

障がい者の状況

令和5年「障害者白書」によると、全国の障がい者数は、身体障がい者436万人、知的障がい者109万4千人、精神障がい者614万8千人で、合計1,169万2千人です(複数障がいダブルカウント)。国民のおよそ9.2%、「11人に1人」という割合で何らかの障がいを有していることとなります。就業者は64万3千人で、大多数が自宅内で生活しており、一定数が医療機関や介護施設などに入所中です。

最も厳しいハラスメントが「虐待」

障がい者に対する最大のハラスメントは「虐待」です。令和4年度の「障がい者虐待の状況(厚労省調べ)」によると、被害に遭った場所として、職場において761名、福祉施設において1,352名、家庭において2,130名です。家族など養護者による被害が多いという実態は、民生委員・児童委員として留意すべきことでしょう。

人権とハラスメントの間に

人は皆、温かい心とお互いの人権を尊重し平穏に暮らしたいと願っています。家族として、互いに支え合っています。それが、なぜ、ハラスメントを犯す事態になるのでしょうか?

ハラスメントの小さな芽

私たちはみんな、多様な「価値観」と「こだわり」も持っています。人権の視点から問題となってくるのが、「偏見」や「固定観念」です。「ハラスメントの芽」となるからです。芽は徐々に深まって、根も葉も肥大化して「虐待」という行為につながるのです。

無意識の「偏見と固定観念」

ハラスメントの芽は、もともと当人に悪意はないので、気づかないのです。自分が相手の立場と入れ替わったと仮定すると、「ハッ」として気づきます。次の「事例」から当事者の気持ちと願いを受け止めましょう。

《事例》～障がいのある人の声～

- ・障がいは本人の責任ではない
- ・介助者がいても、本人に話しかけて
- ・障がいは誰にでも起こり得るもの
- ・特別な目、同情、軽蔑は耐え難い
- ・「頑張っている」と美化しないで
- ・可哀想と思う風潮を改めて
- ・重度でも生き甲斐や役割を持てる
- ・施設の中だけに囲い込まないで
- ・障がいがあっても普通の生活を送りたい
- ・私を一人の人間として見て

※「障害のある当事者からのメッセージ(知ってほしいこと)」の集計結果(内閣府)
(<https://www8.cao.go.jp/snougai/kou-kei/toujisha/siryo06.html>)
を加工して作成

◎無意識のレッテル貼りは「ハラスメント」です。

◎障がいのある人もない人も自由に考え生きられる地域社会をめざして。

民鏡

高橋 君枝

千葉県民生委員児童委員協議会
会長・本誌編集委員

▼1年が経つのは早いものです。今年を振り返ってみますと、元旦におきた能登半島地震、翌日には羽田空港での飛行機事故など、お正月からびっくりしてしまいました。能登半島地震と9月の豪雨から未だ復興がままならず、仮設住宅に入れない方もいると聞いています。心からお見舞い申し上げます。台風や線状降水帯による洪水や土砂災害が各地であり、自然災害の怖さを改めて身にしみたところです。▼8月にフランスのパリで開かれたオリンピック、パラリンピックでは、選手の皆さんが白熱を駆けたくさんのメダルをとり、私たちを楽しませてくれました。▼さて、令和4年の一斉改選から三年がたち、来年は改選の年になります。▼習志野市では、欠員のないよう準備を始めており、民生委員、主任児童委員の役割や活動内容を記載したリーフレットを作成し、市内全戸に配布します。前回の一斉改選で新任者の約3割がリーフレットを見て民生委員になり、現在活動しています。リーフレット配布を通して、民生委員を知っていただく良い機会となりました。

民生委員児童委員の
ひろば 12月号 2024 December

令和6年12月1日発行
(毎月1回1日発行)第858号
昭和31年5月18日
第三種郵便物承認

●発行所/全国社会福祉協議会
〒100-8980
東京都千代田区豊が丘3-3-2
電話03-3581-6747

●発行人/池上 実
●編集人/平井 麗元

●定 価/1部10円(購読料は会費を含む)

ホームページを
ご活用ください

☆民生委員・児童委員専用ページ
をご覧いただくためには、次の
パスワードを入力してください。

パスワード 20131201

ホームページの
ご案内

全国民生委員児童委員連合会のホームページ
全国民生委員互助共励事業のホームページ

お知らせ

令和6年12月1日より、民生委員・児童委員PRグッズ「新任候補者向け説明用パンフレット」を「新任候補者向け説明用チラシ」にリニューアルしました。活動内容と魅力を広く一般に知っていただくために、ぜひご活用ください。

【注文用紙掲載場所】全民児運トップページ▶
児童委員・民生委員/民児協関係者専用ページ▶
▶7.民生委員・児童委員PRグッズ

全民児運 で検索
互助共励 で検索



ピアサポーターに学びたい

やや旧聞に属するが、10月10日は世界メンタルヘルスデーだった。メンタルヘルス（心の健康）普及啓発の映画上映会を鳥取市内で開いたピアサポーターの本多まどかさん（43）は「トトリアクションクラブ代表」は「映画のよくなき跡は起らないまでも、支えてくれる人はいらる」と訴えていた。ピアサポーターの活動を深掘りすると、共生社会のありようが見えてきた。

つながりが必要

本多さんは大学を卒業して実家に帰った際、家族との間で軋轢が生じ、体調を崩した。家族が文句を言うから私はこうなったという幻聴が聞こえ、妄想は止まらず、統合失調症の診断結果を受けたのは25歳の頃だ。

ターニングポイントは30代半ば。ピアサポーターって、知っていますか？

と声をかけた精神科医がこう続けた。「あなたみたいに苦しみ、リカバリー（回復）しようとして悩んだ経験を伝えることで、同じように悩んでいる人を助けることができる」。説明を受けた本多さんは「苦しみが昇華される」気持ちになり、鳥取市のピアサポーター養成講座を受け、前出の上映会を開催するに至った。映画は、主人公の男性が薬物依存を乗り越える可能性について支援者が「信じている」と話す場面が印象的だった。

本多さんの歩みや思いは10月21日付の日本海新聞「ボイス」に詳しい。肝は、メンタルヘルスの不調に苦しむ人たちに向けて「誰かとつながることが回復に必要な」とメッセージを発信している点だ。そして、もうひとつ。他のピアサポーター、精神保健福祉士、保健師と共に立ち上げたトトリアクションクラブの目的に「偏見の解消」を掲げている点である。

偏見はまだある

鳥取県精神障害者家族会連合会が本多さんらを迎えて11月5日に倉吉市で開くシンポジウム「わかつてほしい、本当の事実」の狙いはまさに偏見の解消だ。精神障害者の歴史をひもとくと、親族が患者を自宅の小屋などに閉じ込める「私宅監置」を認めた精神病患者監護法が1900年に制定された経緯がある。人権擁護の観点から批判が高まり、50年後に私宅監置は禁止されたとはいえ、社会から抹殺された暗い歴史を踏まえ「偏見はまだある」と鳥取県精神障害者家族会連合会会長の田淵真司さん（82）は指摘している。

精神障害者に対する偏見が社会に潜存しているため、メンタルヘルスが不調であるにもかかわらず相談や受診を先延ばしにし、回復の遅れにつながるものが問題視されている。偏見の解消にはまず、精神疾患は誰でもかかり得ると認識することが欠かせない。

文部科学省は2022年度の高校学習指導要領改訂で保健体育の「現代社会と健康」に精神疾患の予防と回復を盛り込んだ。「生の声」を聞くため、ピアサポーターを招く高校もある。ピアサポーターの授業を11月に計画する鳥取東高教諭の福長正彦さん（45）は「どういった経緯で発症したのか、どんな症状なのか、どう回復したのか。経験者の話は真実味があり、心に残る」と期待している。

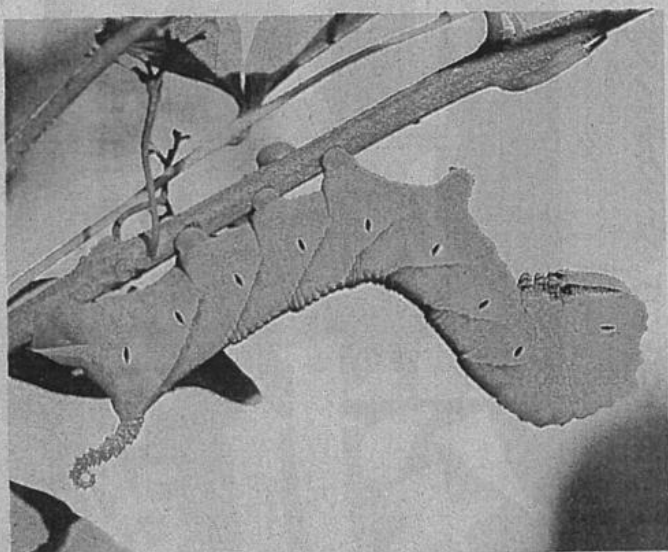
こうした授業は精神疾患と向き合う人をお願いやる心を育成するはずだ。現在、鳥取県内のピアサポーター養成講座修了者は51人を数える（県福祉保健部調べ）。共生社会をつくる上で、ピアサポーターに学ぶことは多い。それだけに、ピアサポーターの収入の安定化を図る施策を検討すべきだ。



キュートでしょう。スズメガ科の昆虫「クロメンガタスズメ(以下、本種)」の幼虫です。なんととっても特徴的なのは、S字にカールした尾角です。S字の尾角を持つスズメガ科の幼虫は本種だけです。目撃された人もいるのではないでしょう

クロメンガタスズメ

寒さが苦手



クロメンガタスズメの終齢幼虫(倉吉市)

今年、久々に本種を目撃しました。10月中旬、本種の幼虫を自宅で採集しました。水やりをするため庭に出たところ、栽培していた草の葉がなくなっていることに気づき、探していたところ別の鉢の上で体をくねらせていた終齢幼虫がいました。本種は、蛹になるため土に潜ろうとしていたのだらうと思い、すぐに飼育セットを作って部屋に持ち込みました。しかし、土に潜



精神障害について学ぶシンポジウムには約100人が参加し、当事者らの体験談に聞き入った＝5日、倉吉体育文化会館



自身の経験を生かして精神障害者と向き合うピアサポーターの岩尾さん

鳥取県は2020年度から、会が倉吉市内で開いたシンポジウムでは、鳥取市で活動している岩尾勝彦さん(59)が講演しました。岩尾さんは20年「近所の人からどうして仕事をしないのかと言われてしまった」と振り返ります。家族の支えでスポーツクラブに通うようになり、人との接点を持つことで回復しました。岩尾さんは「患者の話を聞く時は、相手と同じ目線で悩みを聞くことに徹しています」と話しています。(本高屋修)

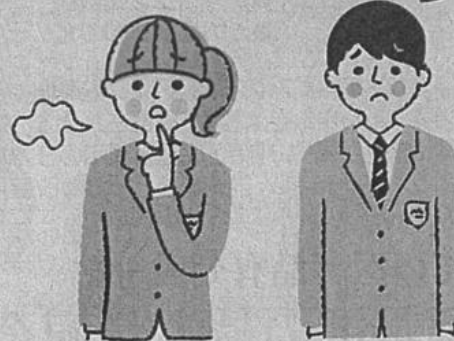
〇〇何!?

ピアサポーター

経験を生かして 社会復帰支える

精神障害は誰でもかかる

皆さんは「ピアサポーター」、「ピアサポーター」という言葉を聞いたことがありますか。病気や障害から回復した人が、自身の経験を生かして患者などの社会復帰を支えることです。ピアは英語で「仲間」、「同等」という意味です。医師や専門職とは違い、相手と対等な立場で悩み、相談に応じることが出来ます。がん患者や精神障害者、不妊治療経験者など、さまざまな医療・福祉の現場でピアサポーターが活躍しています。今回は精神障害者ピアサポーターについて紹介します。



精神障害は誰でもかかる。福祉サービスの知識を身に付ける研修を行っています。患者に対して「何を考えているかわからない」「怖い」「怠ける場所を増やす取り組みがある」という偏見がまだまだあります。自分が精神障害者だと言いつつ、孤独を感じる人もいます。

岩尾さんは20代の頃、早朝から深夜まで働きつめの生活が続き、過労でうつ病になりました。自宅に引きこもり、乗っています。

(本高屋修)

バ学校形式で

(同市鹿野町小別所)に「登か、体育館でバスケットボールする。認知症プランの授業は短期記憶を上げるため、むくこともできる。

のクイズやゲームが中心となり、一般プランでは特別支援学校の現役教師や元講師が実際に教べんを執り、日本史や理科、音楽を学ぶ。休憩時間には、鳥取市民に昔から愛されている亀井堂のサンドイッチや白バラ牛乳などが振る舞われるほ



鳥取県東部と兵庫東北但西部の1市6町で構成する麒麟のまち圏域の観光振興を担う地域連携DMO「麒麟のまち観光局」の地域活性化事業の一環。同観光局のサポートを受けながら、広告や事業の企画製作を手がける「ORIXYN」(同市吉成)が事業主体となり実施している。

同社の樹下昌矢社長は「懐かしい青春時代を回顧できるプログラム。日常に追われている人も心癒やされる場所になる」と話す。期間後も事業継続を予定し

心の健康保つ 大切さ知って

鳥取東高で特別授業

鳥取市立川町5丁目の鳥取東高で13日、メンタルヘルス(心の健康)を学ぶ授業があった。精神障害者ピアサポーターの本多まどかさんと市保健所保健師の酒嶋



「心の健康について考えてほしい」と語る本多さん(13日、鳥取市立川町5丁目の鳥取東高)

里美さんが講師を務め、心の健康について日頃から考えておく大切さを訴えた。同サポーターは、精神障害者が自身の経験を基に別の精神障害者を支援する。精神疾患に関して学ぶ保健体育の授業の一環で開かれ、1年生40人が参加した。酒嶋さんの質問で進めら

れ、本多さんは大学生時代に忙しさに追われて腹痛になったり、眠れなくなった。寝たきりになるなど、精神疾患で苦しんだ経験を語った。生徒に対して「(精神疾患に)自分もなるかもしれないと思って、自分の心の健康を保つにはどうしたらいいかを普段から考えてほしい」と伝えた。

山本優杏さん(16)は「人から指摘されてもなかなか気づきにくいこともあると分かった。自分の心の健康について考えたい」と振り返った。(安井桃華)

湾インフルエンサー来県

宇倍神社など訪問、誘客期待



りの様子を取材する金さん(右)=13日、鳥取市中井の因州中井窯

フェイスブックのフォロワーが6万4千人の歐拉さんと、フォロワーが3万1千人の金大佛さん。欧拉さんは主に女子旅情報を、金さんは旅行や美食情報を中心に発信している。

台湾からの観光誘客を促進しようと、市が取材ツアーを企画。紅葉やスイーツ、民芸などのスポットを中心に巡る。因州中井窯では、職人がろくろを回して作業する様子を写真に収めたり、

本多 まどかさん(43)

トットリアクションクラブ代表

1981年、鳥取県湯梨浜町生まれ。鳥取大医学部保健学科卒。トットリアクションクラブ代表。猫好き。

【世界メンタルヘルスデー】
世界精神保健連盟が1992年に偏見をなくして正しい知識を普及するために定めた。

うつ病告げられて

鳥取大医学部保健学科に進学し、米子市で一人暮らしを始めた。自由に生活し、県外出身の学生との交流を通していろんなことを考えた。高校生の頃までの考え方は一変した。大学を卒業し、湯梨浜町の実家に帰ると「どうしちゃったの?」と言われた。私が育った家庭は宗教を重んじていたこともあり、厳格な母たちとの間で軋轢が生じた。大学で取得した看護士の資格を生かして働くこともできず、ストレスを感じた。

そのうち、頭が痛くなり、おなかの調子が悪くなり、眠れなくなった。体はだるく、ぼろぼろな状態が続き、病院で診てもらった子宮内腫瘍だった。さらに、うつ病の疑いがあると医師に告げられた。精神的にやられている自覚はなかったのに、受け入れられなかった。



メンタルヘルス(心の健康)の不調に苦しむ人が後を絶たない。ピアサポーターの本多まどかさん(43)=トットリアクションクラブ代表=が世界メンタルヘルスデー(10月10日)で発信したメッセージは「つながり」だった。なぜ、そう思いますか? インタビューで深掘りした。(聞き手は論説委員長・深田巧)

寝たきりの生活となり、怒りの感情が湧いてきた。まずは家族に向かった。家族が文句を言うから私はこうなったという幻聴が聞こえ、妄想は止まらず、私は寝室のドアにタンスや本棚を並べてパレードを築いて閉じこもった。1週間、そうしていた。家族が力づくでドアを開けた時、私は衰弱していた。救急外来に運ばれ、即入院となった。統合失調症の診断結果を受けたのは25歳の頃。その後も入院を繰り返した。家族との関係は改善されず、縁を切るようになった。

リカバリーの兆し

入院先で、精神保健福祉士になったばかりの女性が私の話を親身に聴いてくれることが救いだった。

入院治療、投薬治療に限界を覚え、心理学を勉強することにした。私の心にヒットしたのが「アドラー心理学」。創始者のアルフレッド・アドラーは20世紀初めに活躍したオーストリアの精神科医だ。目的を持ち、変わろうと決心すれば、いつでも変わる。この考え方に基づき、私は、悲しいから泣くのではないと思うようになった。そして、わくわくした。

メンタルヘルス不調の人たちにメッセージ発信



トットリアクションクラブのメンバー。前列左端が本多まどかさん。10月5日、鳥取市のさくらんぼ会館。

私は寂しかったのであり、認めてほしかった。愛されたかったのだとの結論に達した。そうであれば、愛される人間にならなければいけない。そう考えた。

学習指導の対象に

私は、自分らしく安心して暮らせるまちづくりをメンタルヘルスの視点から考えたいと思っている。トットリアクションクラブの目的として「精神疾患、精神障害の正確な知識と認識の普及。それに伴う偏見の解消」を掲げた。振り返れば、私自身に偏見があった。うつ病は特別なものであり、私の生活には関係ないという認識だった。だから、うつ病の疑いと告げられた時、受け入れられなかった。

上映会が好評な訳

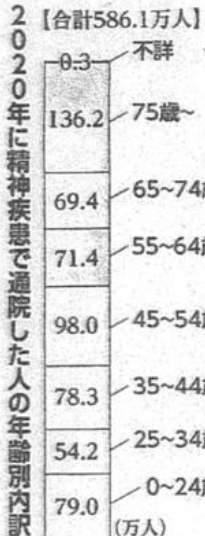
私が専ら始めた鳥取市で精神障害のピアサポーター養成講座が開かれ、受講した。市認定のピアサポーターとなり、市内の地域生活支援センターで働き始めた。これを機にいろいろな団体とつながり、2022年に世界メンタルヘルスデー関連イベントの映画上映会に参加した。鳥取にも上映会場を設けようと地元ピアサポーター、精神保健福祉士、保健師で立ち上げたのがトットリアクションクラブ。昨年に続き、今年も10月5日に鳥取市のさくらんぼ会館で上映会を開いた。

編集後記

本多まどかさんの来し方、いかがでしたか。聞き手の私としては、うつ病の疑いを告げられた時に受け入れられなかったという話が特に印象的でした。サイド記事「若者、動き盛りの人に目立つ精神疾患」を、ご覧ください。

若者、動き盛りの人に目立つ精神疾患

厚生労働省の最新データによると、2020年に精神疾患で通院した人は約13・5%を占め、45〜54歳も98万人、16・7%を記録していた。毎年、ほぼ同じ理由に記者会見を拒否し、「うつ」を告白したのは記憶に新しい。心身を鍛える行動と受け止める人が増えたことは必然だった。とはいえ、精神疾患に対する社会の偏見におおきく、病状を知られることを心配する人は少なくないはず。発症し、治療の日々にあっても光が見えない状態の人に、本多まどかさんのインタビュー記事を読んでほしい。



シンポジウム

わかってほしい、本当の辛さ -精神障がい者の“困り感”を理解する-

と き : 令和6年11月5日(火)

13:30~15:40 (13:00受付開始)

ところ : 鳥取県倉吉体育文化会館2階
中研修室

申込み : 各関係機関にお送りする専用の申込書をお使い
いただくか、お電話でお申込みください。
(10/29㍻切・なるべく事前申込をお願いします)

その他 : 気象の状況などによって内容の変更や開催中止と
なる場合があります。

参加費
無料

どなたでも
ご参加
いただけます

一般が抱く精神障がい者のイメージは、事件報道などが要因となり何をするかわからない怖い人というものがあり、それが社会の差別偏見を助長していると思われる。

しかし現在は、精神障がいの要因は脳の一部機能障害であることが広く知られるようになってきました。そして、精神障がい者の実情は、その障がいの特性により日常生活の行動が非常に困難でありながらも日々懸命に暮らしているという人がほとんどなのです。

また、いまや精神疾患は誰でも人生のどこかでかかり得る病気となっています。

今回の研修会では、精神障がいのある人の本当の辛さを知り、併せて精神疾患は誰でもかかり得るという事を再認識することで、社会の差別偏見の解消へのきっかけにしていきたいと思います。

【参加申込み・お問い合わせ先】 鳥取県精神障害者家族会連合会
〒680-0901 鳥取市江津 318-1 鳥取県立精神保健福祉センター内
電話 (0857) 21-3031 FAX (0857) 21-3034

令和6年度 鳥取県家連心のけんこう研修会

日時：令和6年11月5日（火）

13:30～15:40

場所：倉吉体育文化会館 中研修室

【 日 程 】

13:30 開会あいさつ

13:35 ・シンポジウム

「わかってほしい、本当の辛さ

～精神障がいのある人の“困り感”を理解する～」

シンポジスト 本多まどかさん(ピアサポーター)

岩尾勝彦さん(ピアサポーター)

秋田松夫さん(境港市まつば会会員)

酒嶋里美さん(鳥取市保健所保健師)

コーディネーター 相見 楓子(鳥取県家連 顧問)

・質疑応答

15:35 閉会あいさつ

鳥取県精神障害者家族会連合会